RazorEdge

克典

刑事

同僚の死の耐えられない軽さを無視できなかった北村は
〈喪の作業〉をはじめる。
儀式が佳境を迎え、
同僚の去なくなった世界が出現しようとしていた頃、
不意に障壁が屹立する。

Copyright (C) 1992, 1998, 2017 克典 , RazorEdge All rights reserved.

北村: 刑事．40歳前後．離婚歴あり．腹芸ができない

サンドバックを打つような鈍い音。
短い呻き声がそれに重なってくる。

壁に背中をしたたかに打ち付け
痛みで貌を歪め擦り落ちる男。
スーツ姿、四十絡み、中肉中背、
オールバック。
痛みがひき男は目線を
水平よりややうえに向けた。

逆光。四つの影が男を囲み、
立ちはだかっている。八本の脚が
並びまるで柵のようだ。その隙間から
眩い陽光が差している。

男が不意に動いた。脚の柵を突破しようとした。
ワーク・ブーツが顔面にヒットし
男は壁に跳ね返された。

主犯
一七〇センチ、六〇キロ
ジーンズ、黒をベースにしたスカジャン
バンダナを鉢巻みたく締め円形のサングラス
輪郭は三角形で顎が尖り
その唇は艶やかで厭らしい

汗が、男の煤けた横顔を伝い一筋の線を引いた。
埃とか砂とか泥で汚れた男。肩で息している。
衣服で覆われていない部分は悉く痣ができ腫れ
血が滲んでいる。
男は四人を気迫の篭もった視線で見回した。
四人のうちの一人が男にゆっくりと歩み寄り
ながらボロボロのジーンズから何かを取り出し
それを握り締めた拳を振った。
鋭い金属音がして銀色の光を放つ刃が飛びだし陽光を反射した。
男は覚悟したのか、至って冷静だ。刃を視てから
視線をバンダナの双眸に移す。
バンダナが男の側で立ち止まった。
両者の視線が交わり拮抗する。

不意にバンダナは身をかがめ男の腹を刺した。ボディ・ブローを見舞うかのように。
息が詰まり声はでなかった。激痛に貌を歪め身を捩る男。バンダナはナイフを捻り
創口を拡げた。血が溢れだし埃とか泥とかで汚れていた白いワイシャツが染まる。
ナイフを引き抜いた。
バンダナは醒めた眸でのたうち回る男を眺める。
ナイフを逆手に持ちかえ男の髪を掴み貌をあげさせ覗きこんだ。
唐突な幕切れに対する憤りの表情。刺客はその表情を解釈しかねたのか、
訝しげな表情をした。

ブレードを首筋に当てて一気に頚動脈を切断した。血飛沫があがった。
男は反射で仰け反り床で痙攣する。血の霧がトイレの壁、個室の扉、床、天井、四人を
汚す。致命傷だった。一旦男から離れた刺客だったが返り血を浴びながら再び男に
近寄った。そして執拗に刺し続けた。既に息絶えた男を。

停車するが早いか北村が降りてきた。
超高層ビルが空を区切っているが
広く清潔な公園。
現場検証が既に始まっている。
公園内に在る、公衆トイレ。
立入禁止の札の下がった、
ロープが張られていて、
ロープの内側では
警官たちがそれぞれ仕事をしている。
蒼白の北村。

「ガキどもの、遊ぶカネ欲しさの犯行らしく通報で出動した警官が現逮しました。
ですが…水上さんは既に手の施しようがなかったとの報告です」

通夜。
少なからぬ弔問客が訪れ会場の玄関周辺は慌ただしい。
彼らを出迎える水上の遺族。
そのなかに美和子は、いた。水上の妻。歳は三〇から三五、瞳が大きく鼻梁が通っていて卵形の輪郭。肌は張り艶やか。その貌は恰も陶器みたいな質感を醸しだしている。
髪を結い上げた喪服の美和子。気丈に弔問客を出迎えている。
会場の前にタクシーが停まり北村が現れた。
記帳しようと人混みのなかを移動しているとき美和子と目があった。
不意に北村は立ち止まった。後ろについてきていた業者はその背中に阻まれぶつかった。舌打ちする業者。だが北村は無視した。
北村は美和子の前に移動した。
美和子は唇を噛み北村の貌をみあげた。怯え、縋るような表情。
数秒、視線を交わし北村は沈痛な面持ちで玄関を潜った。

会場を辞した、黒装束の北村はしたたかに酔っている。髪は乱れ
その表情は憔悴が露になっていてネクタイは緩んでいる。
千鳥足。片手には焼酎カップがある。おぼつかない足どりで、
彷徨うように家路を辿る。
煌々と照明が闇を穿つ陸橋。だがその下部は闇に浸っている。
北村はその陸橋の外縁に沿って歩いている。陸橋は闇に紛れ
のっぺりとした塊にみえる。北村は凍てついた風に翻弄される
枯れた木の枝のよう。

嘔吐感を催した。
路端に駆けた。
上体を前傾し嘔吐する。胃液が喉を傷めつける。咳込み泪ぐむ。
胃の内容物が空になり、胃液の混じった唾液を吐きながら、
吐寫物を避け陸橋に背を凭れさせずり落ち尻餅をついた。
意識が混濁していて、虚ろな視線は虚空を彷徨っている。
ふと我に返った。ジャケットのポケットに手をやり、
パーラメントの箱とライターを取りだし箱から一本抜き、くわえ
火を点け、喫う。
全身の筋肉を弛緩させ苦蒸したコンクリートに支えられていた。
視野にさっきまで扇いでいたカップ酒の空になった瓶が転がって
た。焼酎はこぼれアスファルトに染みをつくっている。
陸橋を渡る国道の照明が微かに陸橋の麓まで漏れている。
北村はその空瓶を掴みアスファルトに投げつけた。砕け散った。

課室。一七時半を回り室内は閑散としている。
椅子の背に脱いだジャケットを掛けデスクで
北村は水上の事件資料を閲覧している。
その表情は落ち着いていて、文書の収められ
たクリア・ファイルをめくる動作も緩慢。
現行犯逮捕された五人組は既に送検された。
彼らの供述に矛盾はなかった。容疑は強盗殺人。
事件としての処理はほぼ終わった。
惰性で頁をめくっていた。醒めた表情で。
人の少ない室内は書類をめくる音が聞こえるくらいだった。
不意に北村の手が止まった。めくりかけていた頁をもどす。
その頁の一行を、北村の視線がなぞった。
主犯の松井は暴力団中原組構成員との交際もあり……
文は続いていたが北村はその部分に反応を示した。

北村はデスクを離れパソコンの置いてあるブースに移り、
中原組に関する資料をプリントアウトしそれを眺めながら
室内に幾つかあるスチール棚のそのうちの一つの前に行き
分厚いファイルを取りそれを抱えデスクに戻る。机上に
分厚いファイルを置き、開く。住宅地図。A3判。
プリント・アウトした文書に記された住所を索引で探す。あった。
その頁を開く。地図上を視線が走査する。あった。
北村はそのコピーをとった。

時刻は、一七時を回った。六車線の通り、そう高くはないビルディング群が通りに沿って建っている。ラッシュのピークは過ぎたが通行量はまだ多い。

通りに面したビルの一つ、一階部分がテナントとなっているが老朽化しているせいか、空きテナントとなっていて煤けたガラススクリーンに「貸店舗」と張り紙がある。通りは街灯やネオンやビルの窓から漏れる照明で明るいがここだけ闇が差し込んでいる。

その空きテナントの玄関前はクルマが一〇台ほど停められる駐車場となっていて現在、八台停まっているが何れも無断駐車、その八台のなかに、紺のプレセアがある。

運転席に、北村がいた。

六車線を挟んだ斜向かいのビルの三階左端のドアを視あげている。

四人でてきた、北村が監視していたドアから。通路を移動する。一人は三〇くらいでスーツを着た闘士型の体型。二人は若く長身痩躯で猛禽のような目つきをした奴と短躯で坊主頭の奴。

四人は縦に並んで移動している。坊主頭の前、三番目を歩くのが中原だった。

三六歳、背は一七〇前後、精悍な貌つき、冷酷さを全身から発散している。四人はエレベータに乗り込んだ。

北村はシートに座り直しシートベルトを締めた。

プレセアの四台前を走行する、全てのウインドウにフィルムを張ったワインレッドのシーマに四人は乗っている。

シーマは歓楽街に入っていた。キャバクラが建ち並び品のない看板がひしめき合っている。

シーマが左ウインカーをだし路肩に停まった。北村もそれに倣い、シーマの後方一〇〇メートルの位置に停車した。

北村はグローブボックスから道路地図をとりだしそれを調べる振りをしながらシーマの動向を観察する。

助手席のドアが開き長身の若い男が降り後部座席左側のドアを恭しく開けた。中原とスーツの男が降り若い男に何か言って通りに面したキャバクラばかり入ったビルのエントランスに入った。

北村は近くの立体駐車場にクルマを置き、その付近のコンビニや喫茶店を梯子し中原が引き揚げるまで張った。

課室。斜光が課室の西側の窓から差し込んでくる。
壁に掛かった円形のアナログ時計が五時半を指そうとしていた。
勤務を終え北村はデスクで一服すると椅子に掛けていたジャケットに腕を通しながら課室をでて廊下を経て駐車場へ最短の階段を駆け下りた。

既に辺りはすっかり暗くなっている。
北村は中原のオフィスを張っていた。場所は昨晩と同じ。
灰皿には吸殻が溢れ副流煙が車内に充満している。
北村は、中原組の借りている、三階の左端のドアをにらんだまま。
その北村を監視する者がいた。時機を見計らい、物陰から躍りでた。
監視者はエンジンの切られたプレセアに迫り助手席のドアに至る。
気配。
北村は頸を巡らせた。
刑事、だった。

署、会議室。
北村は織田を連れてきた。
席に着き織田に椅子を勧めワイシャツの胸ポケットからパーラメントのボックスと使い捨てライターを取りだしながらアルマイト製の灰皿を側に寄せ、タバコを一本取りだし口にくわえ火を点け喫い始めた。
手にしていた二本の缶コーヒーのうち一本を無言で織田に差しだすと織田は「どうも」と軽く頭を下げ北村が自分の缶のプルキャップを開け一口飲んでから「頂きます」と断り北村に倣った。

「……協力させてください」真摯な表情の織田。
「別に確信があるわけじゃないんだ」諭す北村。

「部下でしたし、可愛がって貰った。
……信用していました。
北村さんも、そうでしょう？」
北村は申し出に虚を衝かれた。それからふと微笑み頷き、
「手伝え」

昼下がり、水上の棲んでいたマンション。
リビング。L字形のソファに、脱いだジャケットを折り畳み傍らに置いた北村とフレアスカートを穿きブラウスのうえにカーディガンを羽織った美和子が座っている。
双方、俯き微妙な表情で沈黙している。テーブルに置かれたコーヒーが冷めかかっている。時が澱んでいる。
北村が一口飲む。美和子もそれに倣う。
美和子は憔悴している。蒼白で、肌がぱさついている。
どちらも何を話せばいいのか判らない。

窓から差す斜光がテーブルとそのうえに置かれたソーサーに乗ったカップとティースプーン、クリスタルの灰皿に反射する。
「…また来る」折り畳んだジャケットを掴み北村はソファを離れた。
「……」美和子は無言で玄関に移動する北村を見送りについてくる。短い廊下を通る。

不意に、北村は立ち止まった。背に、美和子がしがみついてきた。
「……」
暫く、そのままでいた。衣越しに美和子の体温や拍動や呼吸を感じる。
躊躇はした。躊躇しながら、振り向き、震える両肩を掴んだ。倒れ込むように、美和子は北村の胸にしなだれかかった。

合流から一週間が過ぎようとしていたその夜も、織田とともに張り込みを実施した。

夕闇。半裸で、虚脱状態で横たわり北村は天井を、美和子は仰向けた北村に背き躰を海老のように丸め床を視るともなく視ている。

ごめんなさい

後悔していた。

北村は応えず、衣服を手渡した。

張り込みの方は、異状無しに終わった。

帰宅した自宅のリビングに置かれたソファに凭れ天井を眺める北村。疲れで照明を暗く感じる。
のろのろと躰を起こし、アーリータイムズをグラスに注ぎ一気に飲み干し咳き込んだ。
咳がおさまり喉から熱が去り北村は決然と
貌をあげ虚空を睨みつけた。
ソファを離れさっき放り出したジャケットを再び羽織りながら玄関に玄関に移動した。

インタホンを押す指。金属製のドアが開く。
でてきた女性は来訪者を困惑した表情で応対した。
北村だった。
美和子は狼狽し目をそらす。動揺しているのが判る。
北村はそれを意に介さない。
逡巡する美和子。膠着状態となった。

果たして、美和子は無言で俯いたまま北村を招き入れた。

水上が抜けたことによって世界の
再編が始まって
二ヶ月が経とうかという頃

中原に対する監視は継続した
ものの、一切、収穫はなかった。

な、
不意に北村が口を開いた。
え、
エントランスを視ることに集中していた織田は反応が遅れる。
「今夜で終わりにしないか」
「何を、ですか？」目的語が判らず訊いた。
「内偵を、だ。
やっぱり水上は単に強盗殺人だったんだろう。もう二ヶ月だしな」北村はさばさばした表情で説明する。織田は戸惑いながらも、
「……私も、最近、やっと水上警部補の死を客観的にみれるようになりました」織田は一言一言噛みしめるように答えた。北村の方に向き直り「異存、ありません」合意した。

今夜で終わり。残り数時間を全うすべく二人は監視を再開した。だが表情には安堵感が拡がっていた。

そろそろ切り上げようとしたときだった。
ビルの前にタクシーが停まった。一人の、スーツを着た男が降りた。
北村と織田の表情が一変した。緊張し、身をのりだし男に目を奪われた。
ビルのエントランスで屯していた中原の部下二人がそいつに駆け寄り恭しく出迎えた。

新城。北村たちの、同僚。
三二歳、刑事二課所属、
身長一七五センチ、体重六五キロ、
育ちは良さそうだが情の薄そうな貌だち。
新城は中原の部下にエスコートされエレベータのドアを潜った。
北村と織田は金縛りにあったかのように凝然と閉じたエレベータのドアを睨み続けた。

二一時。
北村はリクライニングさせたドライバーズシートに躰を横たえ、パーラメントをくわえていた。
新城の棲むマンション付近にプレセアを停め、監視していた。
北村はエアコンも入れずウインドーから覗くマンションの駐車場のゲートを凝視していた。
新城のことを考えた。歳は織田より三つ上だがセクションは二課、暴力団係、印象は切れて、したたか。
水上の死に、新城は関与しているのか？
そうしたことをランダムに考えていて無意識のうちに美和子の肉の温もりを憶いだした。美和子の美しさは幻想的だった。
唯一のダチはもう、この世にいない。妻子もなく、老いさらばえて朽ち果ててゆく。
厭な考えだった。
水上、俺に任せてくれないか。

携帯電話の着信音。
ふと我に返り、北村はダッシュボードのうえに置いていた携帯をとり、でた。

「……はい」
「北村か」聞き覚えのない声だった。
「誰だ」相手は誰何は無視し、
「水上のこと、調べてるんだろう。いいネタがあるんだ」
北村が緊張する。
相手は一方的に喋り待ち合わせの時と場所を指定し回線を切断した。

錆びた、エレベータの扉が開き北村と織田が降りてきた。
エレベータを降りると壁に掛かったこの階の案内板が目に入ってくる。廊下が左右に伸びている。案内板で確かめ、二人は廊下を左に進みいちばん奥のバーの、塗装が剥げ凸凹しているスウィング式の金属でできたドアを潜った。
いらっしゃいませ、カウンターのなかでタバコを喫っているバーテンが挨拶する。薄暗い店内。粗末なオーディオからジャズが流れている。三つ、左がカウンターとなっている。入り口のすぐ横に観葉植物が置かれている。
北村はスツールに掛けようと移動する。織田もそれに倣う。
カウンターの奥の男と目が合った。
男はゴールドのブレスレットをしていてロックグラスを手に北村たちに近づいてきた。
「北村さん、だな」
掠れた低い声。電話の声。
北村は頷く。
「こっち、どうぞ」
奥のボックスに二人を案内した。

ブランデーを注いだグラスを二人の前にだすとバーテンはカウンターのなかに戻った。
「広岡だ」
男が名乗った。歳は三〇半ば、身長は一七〇センチに充たない、痩せぎすで頬が痩けている、

「……単刀直入に言う。
水上は、中原が指示した」「ちょっと待て、広岡さんっていったな、あんたは何なんだ」北村は広岡の言葉を遮った。広岡は躊躇してから「……同業者さ、中原とは兄弟分だ。……これくらいでいいだろう、続きだ。
おたくの社に新城っているだろう」北村が頷く。
「中原と、そいつは癒着してる」別段愕かなかった。情況から予測はできた。

新城の回想

あの晩、中原の部下に見送られエントランスをでようとした。
向かいの歩道に立った男がじっとこっちを視ていた。
目を凝らす。
貌から血の気が引いた。
水上だった。

翌日、新城は水上から呼び出された。
「辞表書け。
一ヶ月、待つ」水上は静かだが厳しい態度で勧告し、その場を立ち去った。

「……それで中原は松井たちを動かして
カネ目当ての無計画な犯行に見せ掛けた……」

広岡は話し終えるとバーボンを流し込み咳き込んだ。
北村と織田は奇妙な表情で言葉を失くしていた。
広岡がマルボロメンソールにダンヒルで火を点ける。濁ったような照明が
空間をディストートする。
まるで騙し絵のなかに迷い込んでしまったような錯覚に陥る。
何故、オレにタレコんだ…？
北村は必死で言葉を絞りだした。

「……余計な詮索はするな、ただオレは中原が気にくわねーんだ。
もう松井たちは起訴されたしよ、
オレがこのネタ掴んだのついに二、三日前でよ、地団駄踏んでたら
……知り合いがおたくらのこと教えてくれてよ……」

知り合いについて訊こうとしてやめた。
想像できた。

広岡の店の入ったビルを後にした。
二人は深刻な面持ちでプレセアを停めた、近くの立体駐車場へ移動する。
一言も言葉を交わさず、アルコール・排気ガス・吐寫物・生ゴミの混じった匂いのする雑踏を掻き分けながら歩いた。

署の前にプレセアが停まっている。
疲弊した二人の刑事。

「明日……課長に相談する」北村が言葉を振り絞る。
「…わかりました」疲れた声で答えて、
「帰ります」織田がロックを外しドアを開け降りる。
北村は当直だった。
プレセアを駐車場に移し署の玄関を潜った。

仮眠室の簡易ベッドに横たわってみたが、
まんじりともしない。

北村は虚空を凝視し続けていた。

新城が借りているマンションに帰ってきた。

幾つものドアが並ぶ一階の中央辺りのドアの前で立ち止まり向き直りスラックスのポケットからキーホルダーを取りだし鍵の束のなかの一本を鍵穴に差し込み、捻った。金属音。鍵が開いた。鍵を抜きながらドアを開け潜ろうとした。その無防備な背中めがけ影が猛然と接近し激突した。

衝撃で前に転び膝をつく新城。
躰を反転させ刺客の方をむく。
刺客は土間に侵入しつつ後ろ手で
ドアを閉め転倒した新城に蹴りを浴び
せる。
怯み尻を床についたまま後退する。
室の照明は点いていない。
闇に紛れた刺客が執拗に新城を蹴り
続け奥に追いつめてゆく。
じりじりと後退しリビングに至った。
顔面、喉、下腹を蹴られ呼吸が詰ま
り躰をくの字に折り曲げ悶える新城。
ふと蹴りが止んだ。

照明が点いた。
新城は反応し、険しい表情で刺客を
仰ぎ視た。目を見開き肺が破れるほど
息を吸い込んだ。
北村だった。

対峙する二人。
視線が拮抗する。
北村は暫く凝然と新城を見据えていた。
ややあって、意を決し歩を進めた。
怯む新城を容赦ないストンピングが襲う。
呻き声をあげながら更に後退する新城。歯が折れ唾液と混じった血が
垂れる。髪が乱れ着衣が汚れてゆく。
背中に何かが触れた。壁。追いつめられた。
がはぁっ
トゥ・キックが水月にめり込んだ。顎を伝う血の混じった唾液。
新城は苦痛に貌を歪め上体を前に折り曲げる。
北村は無様な新城を冷静に視つめた。
様々な想いが錯綜し暫し立ち尽くした。

新城の左側にAVラックがあった。新城が背にしている壁とその左側
の壁にリビングの中央に向け置いてある。
新城はそろそろとそのテレビを置いたAVラックの裏に手を延ばした。
そこに、拳銃があった。

篭もった銃声が一発、それに呼応し五発の銃声がした。
それきり、物音は途絶え鼓膜が破れるほどの静寂が訪れた。

ふと目覚めると隣に美和子がいなかった。
北村はのろのろとベッドを離れ寝室のドアに近付いた。
ドアは半開きになっていて寝室に隣接したリビングが
覗いた。北村の足が止まった。
ソファに腰掛けた美和子の横顔には、表情が、なかった。

新城のマンション。
第一報で駆けつけた捜査員が乗りつけたパトカーが駐車場に停まっている。

一階の通路。五つの扉が並んでいる。その中央のドアの前で立ち尽くしやや俯く織田。痛恨の表情。
視線を辿る。座り込むようにドアに凭れた屍。
織田はふと怪訝そうな表情をした。

北村の死に顔は、安らかな、微笑だった。

produce, scenario, art works:

Nishimura Yutaka

novelize:

Katsunori

photograph:

http://www.ashinari.com/

3D Model:

http://circlehakoniwa.blog.fc2.com/

RazorEdge

克典

刑事

Copyright (C) 1992, 1998, 2017 克典 , RazorEdge All rights reserved.